

寺族会報

第 36 号

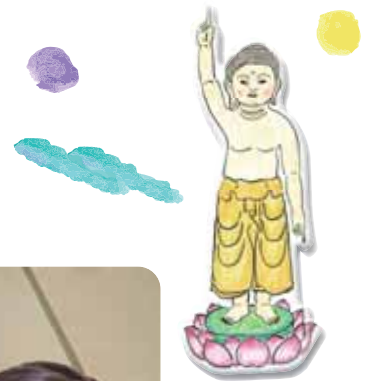
発行 令和3年12月

発行者 曹洞宗宮城県宗務所寺族会

仙台市泉区市名坂字檜町169-4

曹洞宗宮城県宗務所内

電話 022-218-3801



写仏研修



「おかえりモネ」のロケ地 長沼フートピア公園

ご挨拶

曹洞宗宮城県宗務所寺族会

会長 岸 恵代子



なくなりました。

この現状で、皆様快くご寄

稿下さり、寺族永年功労者表

彰を受けられましたご寺族様

には、その御労苦と次世代へ

の想いを感じさせられました。

亡くなられたご寺族様の、

その背中をお手本に若い寺族

様が頑張っておられます。

「震災から十年 復興のあ

ゆみ」は、東日本大震災で特

に被害の大きかった沿岸の御

寺院様をお願いしご寄稿頂き

ました。どんなにご苦労され

たことでしょうか。思い出すこ

とさえ辛いのに本当に有り難

うございました。

さて、寺族会活動ですが、

宗務所を会場とする学習会は

三密を避けるため人数制限が

有り、難しい状況でございます。コロナ禍でも皆様にお届

けできますよう模索しており

ます。

また寺族会名簿も震災後転

居されたり、市制施行等変更

がございます。文書の発送や

お知らせ等を円滑にするため

寺族会としての名簿を熟慮さ

せて頂きます。

我妻会長様が「新しい生活

様式を実践し、健康に十分留

意し寺族会活動を続けて次世

代に受け渡すことが役目」と

話されました。私もその言葉

を実践していきたいと思っ

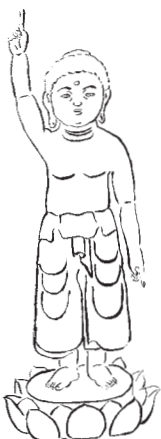
ております。どうぞ宜しくお願

い申し上げます。

合掌

為 身 体 健 全

祈 願



コロナ禍で一年延期となりました東京オリンピック・パラリンピックが開催され、多くの感動を頂きました。特に十代のスケートボード選手が表彰台で述べた「この競技を皆で盛り上げて行くことが大事」という言葉に、周りで支えている方々やご家族の選手を思う気持ちに安らぎを覚え

ました。今年も会員相互の親睦を図ることが難しい状況でしたので、令和三年度総会を昨年同様書面決議とし、役員改選の年に当たり会長職を承らせて頂きました。経験不足ではございますが、宗務所長様、宗務所の皆様にご指導をお願いし、事務局・編集委員・教区理事様のご協力のもと二年間務めさせて頂きます。会員皆様のご理解とご協力よろしくお願い申し上げます。今回の会報でございますが、総会・中央集会・各教区行事がほぼ中止となり、記載出来

ご挨拶

曹洞宗宮城県宗務所長

三田村 道 雄



がなされております。現在に至っても事態が好転することなく、當県においても変異ウィルス型が検出される等、依然として脅威を振るい続けております。

管内寺院ご寺族様におかれましては、コロナ感染の不安を抱えながら、住職様とともに、寺院の興隆、住職の後継者の育成、及び檀信徒教化につとめられていることとお察しいたします。

宗務所行政におきましては、会場が三つの密『密閉空間』『密集空間』『密接会話場面』が発生しないよう、職員の勤務体制にも工夫を成し、事務手続きに支障のないよう努めております。また研修会（講習会）、各種会議等につきましては、オンラインを活用し

て実施している状況でありますが、大勢の皆様が一同に会する大会等につきましては、昨年同様、中止せざるを得ない状況であります。

寺族会の活動におきましても、感染拡大防止の観点より、自粛を余儀なくされていることと存じます。

新型コロナウイルス感染症が収まらず、増加を続けている現状において、移動することの難しさ故に、寺族中央集會等中止になっております。県に於いても二年続けて總會が中止となりました。寺族会役員の皆様には、今まで通りの活動ができないということで、会運営に大変苦慮されて

いるものと存じます。一日も早くコロナ禍が収束し、安心して行事が展開できるよう願うものです。

寺族の皆様には、今後も充分な感染予防措置を施し、健康に留意していただき、法灯の護持、檀信徒の教化にと、お力添えを賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご健勝を祈念申し上げ挨拶いたします。

合掌



為 疫病退散

祈願

令和三年度寺族永年功労者表彰

『寺族表彰』 ― 日々精進 ―

第一教区 圓福寺寺族 三田村 昭子



この度は、寺族表彰を賜り感謝致しております。ありがとうございます。ありがとうございました。

生まれました。生誕以来七十五年の月日も振り返れば、アツという間の人生でした。寺族となって五十有余年、手探りの日々でしたが、この積み重ねが何にも代えがたい私の宝物です。

住職の念願でありました檀信徒会館、庫裡、本堂の建設は、檀徒、信徒、篤信者の皆様のご支援により、完成をしております。

半世紀前、二十五歳の若い住職の元に嫁いでまいりました。幾多の困難を乗り越えて来て、今改めて感じることは、

寺院とは信仰の場であるとともに檀信徒の憩いの場であるということでした。その為にこれからも日々精進をせねばと思っております。

前住職が遷化して二年四月が経過しました。その子弟が二人とも現在大学で学んでおります。孫長男は、美里町の興安寺様で結制首座を務めさせて頂き、来春には大本山へ修行上山の予定です。この修行が無事に終わり帰山するのを楽しみに健康に留意し、頑張りたいものと念願しております。

最後に、宮城県宗務所、宮城県宗務所寺族会の皆様の益々のご発展を祈念申し上げ、感謝と致します。

合掌

『寺族表彰』 ― 出合い ―

第三教区 宝船寺寺族 徳野 光子



この度の寺族表彰をいただくにあたり、もう五十年も経ったとは思

えませんでした。日々の仕事に追われて夢中で過ごしました。嫁いで三年目にお寺で御法事の料理を出すと言われ、否応無しに調理師の資格を取り、ひたすらに料理を続け三十年間働きました。子育ても東堂さんが力を貸してくれました。小さなお寺で副住職は勤めに出ていました。お経も東堂さんとで、息子は永平寺での修行においても困ることは無かったそうです。

今、東堂さんも百六歳になるうとしていますが孫の成長を楽しみに生きてくれてると思っております。息子も東堂さんの姿を見ているのでお寺は必ず守ると言っています。私達老夫婦は、何があっても息子が帰って来るまで頑張らないといけません。

周りの皆様に手伝っていただいでコロナ感染予防の対策をしながらのお盆になり、少し淋しい気がします。

この五十年の間に私には二人の恩人がいます。料理をつくる時も、休日にも掃除や片付けなど、私の不得手なことをすべてカバーしてくれたスタッフです。身体も心も癒されました。三十年余り助けてくれたことは多大な力になりました。

人にはいろいろな出合いがあります。自分にとって必ず助けてくれる人がみつかるはず。自分が心を開いて寄りそって話を聞いてあげられる人になりたいと思っております。この年令になりましたして私がお寺のためになったのかは心配です。

お世話になりました教区の皆様や関係者の方々へ感謝とお礼申し上げます。

合掌

令和二年度

曹洞宗宮城県宗務所寺族

表彰者名簿

☆昭和二十一年一月一日〜昭和二十一年十二月三十一日生まれの寺族
☆右記以前生まれの未表彰寺族
(敬称略)

教区	寺院名	氏名
1	圓福寺	三田村 昭子
3	宝船寺	徳野 光子
4	洞林寺	小野 真喜子
6	瑞雲寺	村上 光代
8	城泉院	高橋 夕キ子
14	慈眼寺	和田 和子
14	長源寺	村田 恵子

(曹洞宗宮城県宗務所褒賞規程第一条第二項該当者)

『寺族表彰』 ― 楽あれば苦あり ―

第四教区 洞林寺寺族 小野 真喜子



この度は、寺族表彰を賜りましてありがとうございます。そして家族に感謝しております。

ました。こういう賞を頂くと、は夢にも思いませんでした。長い間支えて下さった皆様、そして家族に感謝しております。

す。

私はこの寺で生まれ育ちました。七十五年も暮らした事になります。昔は山の中の一軒家と同じで、坂道が多くて、通学にも本当に苦労しました。私が小学四年の時、お寺が火事になり、本当に大変な思いをしました。その時はお寺には誰も居なくて留守でした。近所にお釈迦講で使う団子を皆でまるめに行っている二時間位の間でした。結局不審火で、怖い思いがしばらく続きました。後に檀家の皆さんの御協力で本堂と庫裡が完成しましたが、火事の恐ろしさを身にしみて感じました。その頃は先住である父が元気でしたので、何も考えず甘えてばかりでした。公務員として勤めていた父は退職すると間もなく、体調をくずし病氣と闘っていました。満七十歳を直前に他界してしまいました。

その後が大変でした。私は二人姉妹の長女で、私も妹もお寺に残るとは思っていませんでしたが、母親がいるのでこれを機会に二人で頑張る事になりました。それから親戚のお寺さんや教区のお寺さんにお世話になりながら、息子である今の住職になんとか頑張ってほしいと思い、鉛と鞭を使いながら無我夢中で育ててきました。同時に私自身も一緒に成長したなと思います。楽あれば苦あり本当に実感しました。あつという間に七十五歳になってしまいました。この年になってやっと親のありがたみがわかりました。終点が近づいている私ですが、自分のできる限り住職を支えていきたいと思っております。お世話になった皆様本当にありがとうございます。

合掌

『寺族表彰』——二期一会——

第六教区 瑞雲寺寺族 村上 光代



この度は寺族表彰を賜りまして誠にありがとうございました。縁がありました。

群馬県桐生市より嫁いでまいりました。寺院の事(仏教語・生活習慣等)何もわからぬまま、毎日が勉強と修行と心得て、方丈・祖母(昭和五〇年没)、母(平成二九年没)、子供達、檀徒、地区の方々と共に暮らしてまいりました。頭のかたすみに「二期一会」「無財の七施」がありました。思い起こしますと、晋山式・結制、先住忌法

要、寺族通信教育、寺族会の研修、学習会、事務局、青年会、布教師会の方々の講話、講演会、寺院講習、梅花県奉詠大会、全国大会と多勢の方々

と語りあい、学びあいました。数々の行事を経験しながら、庫裡、観音堂、鐘楼堂が建立されました。息子の瑞世もむかえました。苦しい事も楽しい事もつかの間のことであつたように思い出されてきます。

ここに皆様方の御健康、御多幸を祈り、寺族会益々の繁栄を願って筆をおさめます。

合掌

『寺族表彰』——感謝——

第八教区 城泉院寺族 高橋 タキ子



寺に嫁いで五〇年たち、今回表彰いただき誠にありがとうございました。縁がとうござい

ました。自分自身早いものだな、と驚くばかり。この五〇年を振り返ってみると、いろいろと思うことばかりです。楽しい

思い出、失敗や悩みなどが頭をよぎります。でもひと言で言えば、これまでの人生は、幸せいっぱいだったことは言うまでもありません。もともと私は、一般家庭で育ち、寺のことは何もわからずに嫁いできたので、毎日が無我夢中で過ごしてきた感じがします。

寺に嫁いでまず思ったこと、一年の中で、行事が色々あることを知りました。嫁いで来て間もない五月、寺で集会があった時です。お母さんから「今日は、ごちそうを用意せねばならないので、五、六〇人分で五品ほどいいから料理してほしい」と言われまして。お母さんに教わりながらも四苦八苦したことが思い出されます。でも、そんな沢山の行事を経験することで、檀家の方々、近所の方々と同じつながりを持つようになり、沢山のことを勉強させて貰うことができ、今に至っております。現在、我が家の家族は、八人です。主人と私、息子(副住)夫婦と孫が四人

です。孫達は、すごくなつてくれ「ばーちゃん、卓球しよう」「トランプがいい」「カラオケしたい」等々、更には、ピアノを弾くのにも無我夢中になる子もいれば、踊りに興味を示し得意そうに動き回っている子。料理の好きな子は、「ばーちゃんのも作ったから食べる?」と声をかけてくれる孫たちに囲まれ、毎日の生活に幸せを感じています。

我が寺は、高台にあり、平地から七十段余の階段があるのですが、そこからの眺めと景色は、今更ながら感動しています。前方に田川が流れ、その向こうに七ツ森がくつきりに見える。そして今は、目の前の田んぼが一面青々としたすばらしい眺めには、改めて感動し、「いい所に嫁いできたんだな」と思います。これも主人に感謝ですね。これからも寺族の一員として、周りの方々への感謝を忘れず、住職を支え、寺を守って行こうと思います。

合掌

寺族物故者供養

謹んで御冥福をお祈り申し上げます



令和二年四月一日〜令和三年三月三十一日御逝去

(敬称略)

教区	寺院名	氏名	死亡年月日
8	弥勒寺	武藤 昭子	令和二年六月三日
3	道安寺	吉田 テル子	令和二年六月十七日
7	雲泉寺	坪内 しん	令和二年九月十二日
18	満蔵寺	佐藤 ユキ子	令和二年十月三十一日
3	玉川寺	村上 澄子	令和三年一月二日
4	秀麓齋	長澤 梅枝	令和三年二月十二日

当該者寺院からのお申し出により、掲載されていない物故者の方もいらっしやいます。

義母のこと

第三教区 玉川寺寺族 村上 礼子



令和三年一月二日看取り状態の義母が行年九十二才で旅立ちました。

た。

お正月でコロナ禍、どのようにならぬかと心配でしたが、御本寺、教区及び法縁寺院や檀家の皆様のお蔭で無事に葬儀を執り行え、住職ともども安堵致しました。義母は、二十一才で縁があり、教員だった先住が常に不在の為、接客を一人で切り盛り、三十代後半から十年は、未認可保育園の仕事にも加わって、負けん気とバイタリティーで頑張っていたようです。

亡くなってから、七ヶ月程が過ぎ、義母を偲びながら筆

をとっていますと、思い出されるのが色々あります。恒期行事の際は、台所に身動きとれないほど人が集まり、賑やかにお齋の準備をしていたこと。婦人会で日帰り旅行をしたり、梅花講を立ち上げ、学びや交流を大切にしていたこと。まれに、歯に衣着せぬ物言いもあり、相手が苦笑いなんてこともありました。

そして、花が好き、お茶飲みが好き、温泉大好き、真心という言葉も大好き、話の端々に登場したものです。ご主人を若くして亡くされた方が、草取りを手伝ってくださっていたとき、受け入れられない苦しさ寂しさを話され、それを我が事のように頷き、よもやま話で泣いたり笑ったりし

ていました。そのような姿に人としてのあり様を学ばせて頂きました。また、昨年は良くご本尊様や亡き住職に手を合わせ話しかけていました。何だか、そのような姿に尊さを感じています。そして、こんな言葉が思い出されました。

見えなくてもお花を

供えたい

食べなくても美味を

供えたい

聞こえなくても

話したい

見えざるものへの

真心は美しい

どうぞ、これからもお見守りくださいね。合掌

母の思い

第四教区 秀麓齋寺族 長 澤 寿美子



母は、寺の梅花講の一員として、毎年のように県大会、全国大会へと出掛けておりました。同じ教区の寺族さんや、梅花講の皆さんとも、長年仲良くさせていただき、そのご縁もあり、「観音巡礼」にも加わり、参拝しておりました。「奥州

三十三観音」「坂東三十三観音」「秩父三十四観音」を三度満願、又「四国八十八ヶ所霊場」も巡礼しました。その納経帳を、『棺の中に入れて欲しい』と、随分前に言われ、心留めておりました。家では、良く働く母でした。早朝から、日の落ちるまで畑仕事。時間を見つけては、編み物、和裁、洋裁と何でも出

来る母でした。近所の人達とも、楽しそうにおしゃべりに花を咲かせておりました。孫ひ孫に囲まれて生活し、主治医に『梅枝さんは、不死身だね。』と、言われ続けておりましたが、とうとう令和三年二月二日に永眠致しました。享年九十二歳でした。その日は、奇しくも孫(二男)の誕生日でした。今年一月病院での検査後、手を合わせて、こちらを見て

いる姿が目には焼き付き、思い出すと今でも目頭が熱くなります。もう自分の死期を感じていたのかもしれない。

母としての生き方を子供達に示し、寺族としての役目も全うして亡くなりました。

母からは数えきれない色々な事を学びました。私もその母に近づけるよう、これからも精進したいと思っております。合掌

母を偲んで

第八教区 弥勒寺寺族 武 藤 とし子



義母は昭和元年に生まれたので昭子と命名されたそうです。

二十歳の時、在家から寺に嫁ぎ、農閑期には本堂で嫁入り前の娘さんたちに和裁を教

えていたこともあったようです。時折、墓参の時など義母とあまり歳も違わない方々が懐かしそうに話をしている光景がありました。

教員をしていた義父(先住職)との間に二人の息子に恵まれました。長男(現住職)

も役職に勤め、私も教員を続けておりましたので、長命だった先々住職と寺を守り、長年、我が家のマネージャー的存在でした。境内の美化に努め、孫二人の面倒を見ながら家事をこなしていた頃の毎日はさぞかし大変だっただろうと思います。私がその立場になった時、痛感し、感謝の気持ちでいっぱいです。

後年は、梅花にも挑戦するなど御寺族や檀家の皆様との交流の中で研鑽を積み、日常に生かしながら寺族として精一杯生きた生涯でした。夫、

子、孫が共に法衣姿で並んだ写真を亡くなるまで大事に手許に持っていた義母の思いが偲ばれます。

令和一年度会員物故者の方々はそれぞれの境遇の中で仏教の教えを学び、尊い仏縁に恵まれたことを感謝し、寺族としての生き方を考え、毎日の生活の中で実践されての生涯だっただろうと思います。義母を始め、この度物故者の一人ひとりの在りし日のお姿を思い浮かべながら御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

出 会 い

第十八教区 満蔵寺寺族 佐藤 ユキ子



二〇二〇年
十月三十一日、
享年九十四歳
で義母は永眠
いたしました。

義母は戦争で祖母の居る田舎に家族で疎開、そして前住職と結婚しました。戦争が終わり義母の家族は都会に戻り、一人慣れない土地で結婚生活

寺族としての生活が始まりました。都会育ちの義母にとって田舎の生活は計り知れない苦勞、努力があったと思えます。いろいろな方々が頑張っている義母を応援してくださいと、とても感謝していました。

私と義母との出会いは、岩手・宮城内陸地震で私の身内を亡くし、当寺で葬儀を行ないお墓がなかったのでお骨を預かっていただきました。月命日にお参りに来ると必ず声を掛けていただきました。そんな些細な事がとても嬉しかった事を覚えています。それから縁があり現住職と結婚し家族になりました。

義母は八十歳頃から痴呆症を患い、だんだん人の名前も忘れやすくなり、今の事も忘れて何かを尋ねても「わかりません」と言うような状態でした。しかし、私の時もそうでしたがお参りに来た方々に「休んでいって」「お茶を飲ん

でいって」と必ず声を掛けるのです。お寺は敷居の高い所、お墓参りしてすぐ帰る所しか頭になかったのですが、義母の一言で、心がやすらぎ、ほっとした自分がいて家庭的だなあと思いました。私も義母のようにどんな時でも周りの方々に、さりげない気遣いが出来たらと思っています。

義母が亡くなった時は、コロナ禍の真っ只中で一般の葬儀も縮小している時でしたが、たくさんの方々に見守られながら旅立つ事が出来ました。これも生前たくさんの方々と触れ合い絆を深めたからでしょう。本当に皆様ありがとうございました。

最後になりましたが、今コロナ禍で辛い思いをしていますが一日も早く収束し、普通の生活に戻れます様にお祈り致します。

皆様、ご自愛下さい。

合掌

令和三年度第一回学習会

写 仏 研 修

第十七教区

能持寺寺族

佐藤

富士江



今年度の第一回学習会は、新型コロナウイルスの感染防止を考慮して「会員が一堂に会さずにできるものを」ということで、全国曹洞宗青年会（全曹青）の『三仏忌写仏用紙』を配布し、各寺で写仏することになりました。二枚の用紙の裏にそれぞれ降誕・成道・涅槃の姿勢が濃く印刷してあり、表から薄く見えるその線の上から筆で描いていくものです。

まずは「写仏のこころえ」を見ながら準備します。息子の習字道具を出してきたのですが、最初から筆で描くのが心配だったので、用紙をコピーして筆ペンで練習してみました。漢字の書き順のように写

仏も線を描く順番があるそう
で、目から描き始めて顔から
胴体へ、上から下へと描き進
み、最後に瞳を入れて完成で
す。途中で住職から「黒い下
敷きだと線がよく見えな
いから、白い紙を下敷きにする
と線がよく見えるよ」とアドバ
イスを受けました。

なんと一枚写し終えたの
で、本番は筆で描きます。部
屋を明るくしてお線香を焚き、
髪を束ねて老眼鏡をかけ、イ
スに座って深呼吸で息を整え
ました。四弘誓願文を唱えて
いざ写し始めると、手が震え
て二本の指が一本になったり、
筆先が割れて目が二重になり
ました。筆ペンと違って思う
ように描けないのですが、描
き進むにしたがってその難し
さが逆に心地よく、無心で三
枚の姿勢を写し終えました。
最後に家族の健康とコロナの
終息を願文に書き、普回向を
唱えて写仏を終えました。



「写 仏」

私は写経経験はあったので、
とても貴重な体験ができた。
一つの行をやり遂げたよ
うな満足感を感じ、墨のかす
れさえも「味になっていいか
な」と自画自賛。三仏忌の説
明を読んであらためてわかっ
たこともあり、一人でも充実
した学習会になりました。
説明には「筆ペンでも可
」とありますし、子どもには鉛
筆でなぞらせてもいいと思
います。コロナの終息を祈るた
めにも、より多くの方に写仏
を体験していただけたらと思
いました。



三仏忌写仏用紙

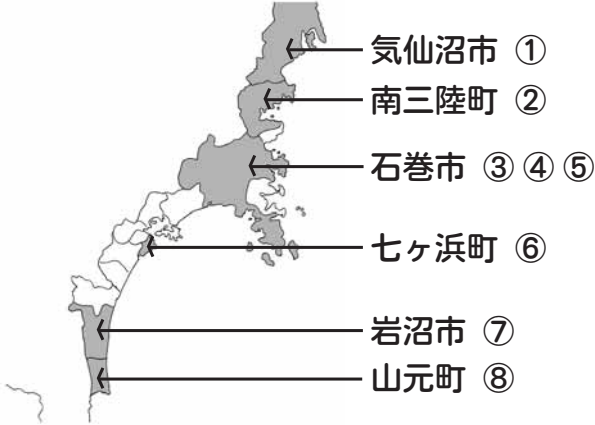


令和三年九月
在宅寺族研修

東日本大震災から十年

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日午後二時四十六分、最大震度七の東北地方太平洋沖を震源とする大地震が発生しました。沿岸地域では巨大な津波に襲われ、河川が逆流し、壊滅的な被害をうけました。

あの日から十年を過ぎましたが、自然災害が地域を問わず起きる中で、警鐘と教訓を伝え、その記憶をとどめておくために寄稿頂きました。



① 気仙沼市 第十六教区 興福寺寺族 須田 祐子



明けない夜はない。支え合えば明るい明日がきっと来る。苦しみ

も悲しみも心に秘めながら歩み続けた十年間。少しずつ甦ってきた気仙沼の状況を幾つかお伝えします。

住居については、家屋の四割が被災しましたが災害公営住宅三十八ヶ所は平成二十九年完成、入居も完了、防災集団移転も平成三十一年に完了し入居となりました。

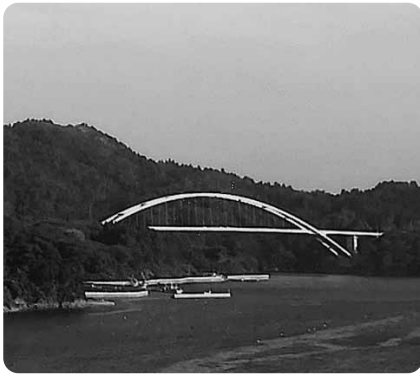
次に水産業で発展してきた町気仙沼にとって重要な「魚市場」。壊滅的な被災を受けましたが三ヶ月で何とか復旧し、平成三十一年に再整備、高度衛生管理にも対応した「新魚市場」が完成し、二十四年連続カツオ水揚げ本一を維持しています。

また内湾近くにテラスから気仙沼湾が一望できる商業施設の

オープン。離島大島に、地産産品、カフェのある野朴海。仙台

行き高速バス、BRTのバス停を併設し、令和三年にオープンした大谷海岸道の駅は眼下に開ける太平洋を一望でき、魚師さんから直接仕入れた魚、野菜、オール気仙沼をテーマに揃えた品々が並び賑わっています。

最後に気仙沼市民にとって大きな大きな希望を与えてくれた「二つの橋」。復興プロジェクトに位置づけられており、二〇一九年に本土と離島大島を三五〇メートルで結ばれた「気仙沼大



気仙沼大橋

橋」は五十年前から島民の悲願で、この度本土と大島の所要時間は十五分程となり命を救う橋ともなりました。

もう一つは、復興道路と位置づけられ令和三年三月に開通したのは三陸沿岸道路の一部として作られた全長一三四四メートル「気仙沼横断橋」（鼎大橋）です。気仙沼から仙台東まで一時間三十五分。陸の孤島と言われてきた気仙沼にとって物流、教育、医療、様々なノウハウ等多くの面で期待されています。

この二つの橋からの眺めは地元の人でも感動する絶景で、日本中に誇れる橋となりました。



気仙沼横断橋（鼎大橋）



被災した本堂 (南三陸)



震災から10年

② 南三陸町

きつと未来へと繋がる橋となる事でしょう。
さて心の復興、生活の復興については百人百様で、亡くなられたご主人を思い今も涙する方、十年間月命日に東京からお参りに来られる方等、一言で語る事はできません。
コミュニティ再構築や公営住

宅入居者の高齢の方の一人暮らし等様々な問題もありますが、これからも支え合い明日へ向かって進んで参りたいと思います。
結びに震災当時県内外のご寺院様、寺族会婦人会の皆様にご支援頂き、今回の日を迎えられるました事に心から感謝申し上げます。
合掌



上の段 完成した雄勝総合支所体育館等
下の段 車の駐車しているところが海拔8.9mです



防潮堤に囲まれた雄勝湾



③ 石巻市 第十二教区 龍澤寺寺族 山 脇 糸 美

私の住む雄勝町は、石巻の中心より車で一時間の所にある、東が海に開けた自然豊かな地です。それ故に常に地震による津波の脅威に晒されてもおります。
先の大震災では、未曾有の災害に見舞われました。それにより、一、六四七世帯、四、二〇〇人の住人が、令和三年八月現在では、五九五世帯、一、一二四人と、三分の一までに減少して

しまいました。震災で亡くなられた方々だけではなく、様々な事情で、やむなくこの地を離れざるをえなかった方々の、いかに多かつたことか、その胸中が偲ばれます。
それでも、各地区の高台に、復興住宅や、自立再建が進み、復興団地として以前の生活を取り戻そうと頑張っております。
海の養殖事業も、国の支援はもとより大勢の人々の支えを受け、風評被害・気候変動・高齢化等の試練にも負けずに、力を尽くしている姿に、ただ見守ること

しかできない私ですが、深い感銘を覚えます。

この十年、仮の建物であった総合支所・公民館・体育館等が、高台の上の段に、下の段には、伝統産業会館、観光物産交流施設が出来ました。そこは海拔八・九メートルの場所になります。新しい雄勝の姿が次第に見えるようになりました。町のにぎわいになってほしいものです。又、雄勝湾を取り囲むように造られている防潮堤は、未だ一部区間完成しておりません。堤の高いところでは、九・六メートルに



④ 石巻市 第十三教区 洞仙寺寺族 八 巻 満喜子

お寺の前には、静かで豊かな海が広がっています。何もなかったかの如く輝く水面は、十年前のその日、狂ったように牙をむき、人の命や集落を根こそぎ奪い去っていききました。

私の中で、三月十一日前とそれからの道はつながらない二本の道となってしまいました。けれども失ったものばかりではありませんでした。たくさんの人との出会いや、多くの方々

ものぼります。全区間完成するとコンクリートの壁に、海と隔てられたように感じられます。安全・安心のためには欠かせないものなのでしょう。

海は、ひとたび牙をむくと、人の力では及ぶことの出来ない猛威をふるいますが、その同じ海は、私たちの生活の糧を与えてもくれるありがたい、母なる海でもあります。これからも、母なる海と共存し、やすらかな幸せを感じながら、生活して行ければと、思わずにはいられません。 合掌

の「何か力になりたい」という心に支えられ、背中を押され、前を向いて歩いてきました。写真にある観音様は、屋根だけを残してつぶれた本堂や庫裡の中で唯一残った仏様です。本当に無傷で横たわっておられました。「見守り観音堂」と名づけられたこの観音様のご縁でお堂がつくられ、ミニコンサートや月一回の写経会等、集いの場が広がっております。

十年という月日は、皆のくらしを大きく変えてしまいました。出会いを結んだ方々と、交流を続けながら、私も又、誰か

の心に添えるよう歩んでまいりたいものです。

きょう、ご詠歌の皆さんと、観音様に手を合わせながらお顔をみておりましたら、なんと嬉しいお顔でした。忙しさに取りまぎれて少しばかり心ここにあらざるの合掌でした。 まだまだ足りない心の復興の日々でございます。 合掌



⑤ 石巻市 第十一教区 光明寺寺族 山 本 道 子



ブルーインパルスの飛ぶ松島基地のある東松島市鳴瀬地区には、津波被災寺院三ヶ寺、津波により亡くなられたご住職さま方、ご寺族さまもおられます。

又旧河南地区、旧矢本地区、旧鳴瀬地区の内陸にあり津波に



月一回の写経会

はあわなかつたが御本堂等被害甚大なお寺さまも多数ありました。当寺も然り、大きな揺れの後外に出て大変驚きました、山門が崩れていたのです。建立されて三十年まさかの出来事に啞然としました。

北上川沿いにあり、軟弱な地盤なので基礎工事などは堅固にしていたのですが、震度六強には勝てませんでした。お檀家さ

まも全壊家屋多数あり、地元神社の本殿建替え等々で山門再建は当分無理と思っていました。平成から令和に変わろうという時に、お檀家さまの後押しもあり再建委員会が発足し、令和二年、元の土台の上に再建されました。

仁王様も一部損傷を修復し無事新しい山門に鎮座しました。

震災の年に当寺住職が遷化しました。十三回忌までには再建しようとは出ていたのですが、お檀家さま、建設委員、多くの皆様のご尽力をいただき震災から十年目で復興することができました。

一昨年、コロナ感染症が全世界に猛威を振り始めました。そのような中で無事復興で

きましたことは、ご助力を頂きました。全ての皆様に感謝です。願わくはコロナ感染症が早急に終息し平和で安寧な日常が取り戻せますように。

合掌



再建された山門

⑥ 七ヶ浜町 第三教区 鳳寿寺寺族 鈴木 一まさ



東日本大震災から十年という月日が経過し、未だ悲しみの中にいる

方々に思いを寄せるところに、当時を振り返る機会を頂戴しましたことに深く感謝申し上げます。

私が寺族として身を置く鳳寿寺は、地元の区長さんからの要請により、住職が発災直後から本堂を開放し、約百名の地域住民の避難所となりました。電気・水道が止まった中での避難生活は約一ヵ月ほど続きました。

町内の他の避難所と比べるとうまく運営できていたのではな

⑦ 岩沼市 第四教区 高林寺寺族 牧野 久美子



当時を振り返ると地震発生時、人が立ってまったく歩けない状況で、本堂は仏具、庫裡は日用品、家具などが散乱し、境内では石碑、灯籠が倒れておりまし

た。その後、住職と母と片付け作業に追われる中、消防団員の方に「大津波警報が発令されましたので早く避難してください」と指示されました。

その直後、お寺の東側の防災林（松林）の上をはるかに越えた真っ黒い大津波を見て、急い

いかと思います。その要因として、一つは避難者のほとんどが「よく知った顔」の人々であったこと、次に「仏様がいる本堂」であったことだと思います。みんな良く知った仲であることこの安心感と、「仏様が見ているからちゃんとしなきゃ」という無意識の信仰心と申しましょうか、神仏を敬う心のおかげで、譲り合いお互いを助けながら生活しておりました。朝昼晩の食事を作ってお母さんたち、ほうきや雑巾を手に堂内を掃除する子供たち、自宅の復旧に汗を流すお父さんたち。各々がやるべき事を自分で見つけて働いておりました。

都会の会社員の家庭に育った私は、寺に嫁いで以来、常に「寺族としてすべきこと」を意識していましたが、避難生活は私に大きな気づきを与えてくれました。それは、仏さまの前ではみんないっしょ、みんな仲良く譲り合って助け合うということです。辛く悲しい震災の中で見つけたこの心をこれからも大切にしながら、みんなといっしょに仏さまに手を合わせていこうと思います。

合掌



千年希望の丘

で3人で車に飛び乗り、無我夢中で避難しました。車中で後ろを振り向くと、車は流され、近隣の家屋、田畑を飲み込み、あっという間にお寺をも飲み込み、今にもこちらに迫りくる勢いでした。

夜が明け、次の日お寺に戻ってみるとかろうじて建物は残ったものの、辺り一面水没しており、二日後やっこの思いで行ってみると境内は瓦礫で足の踏み場もない悲惨な状況でした。

それから数カ月間、本堂、庫裡、墓地を宮城県曹洞宗青年会、第四教区青年会の皆様、ボランティアの皆様、工務店、石材店、



玉浦希望ライン

たくさんの方々には作業や多大なる支援をいただきました。また自分自身が被災されたにもかかわらず、檀信徒の方々がお寺に毎日毎日足を運んでくださり、一緒に復旧作業に励みました。

帰る家もなく、被災された檀信徒の方々を思うと、いち早く復旧し、以前のように集える状態に戻すことが自分にとって今できる事だと一生懸命復旧作業に明け暮れました。作業が進み、元の状態とは言えませんが、お盆前にどうにかお寺に戻ることができました。

一方、地域では四月下旬から仮設住宅の入居が始まりました。

また岩沼市の復興と再生を担う復興計画においてまちづくり検討委員会が設置され、三年後、はれて集団移転先である玉浦西地区の暮らしが始まりました。

また四つの多重防衛策で海岸堤防、復興のシンボルとなる「千年希望の丘」、貞山運河の護岸、岩沼市かさあげ道路「玉浦希望ライン」が整備されました。コロナ禍以前には、名取、岩沼、亘理にまたがるかさあげ道路や防波堤を利用して東北・みやぎ復興マラソンが開催され、全国から数多くのランナーが参加し、賑わいをみせており、現在に至つ

⑧ 山元町 第十九教区 普門寺寺族 坂野 晴美



巨理郡山元町にある、普門寺。主人である住職が修行から帰って

きた当時、義父が兼務住職をしておりました。主人が二十歳で住職に就任した頃は本堂だけのお寺で、震災まで二十八年をかけた会館を建設。檀家さんからの声もあり、平成二十三年夏に息子の大学卒業に併せ庫裡を建設して頂きました。

平成二十三年三月七日大本山永平寺に長男が上山、無事修行を終え送行する日を案じておりました。

三月十一日、あの時のほんの数時間で新しい庫裡、会館、長らく守られてきた本堂は大津波により全壊。檀家の方々もほとんどが家を流失しました。上山して四日しかたない息子と連絡が取れたのは二ヶ月近く過ぎてからでした。当時の永平寺山内で寺院が全壊したのは、我が

また岩沼市の復興と再生を担う復興計画においてまちづくり検討委員会が設置され、三年後、はれて集団移転先である玉浦西地区の暮らしが始まりました。

また四つの多重防衛策で海岸堤防、復興のシンボルとなる「千年希望の丘」、貞山運河の護岸、岩沼市かさあげ道路「玉浦希望ライン」が整備されました。コロナ禍以前には、名取、岩沼、亘理にまたがるかさあげ道路や防波堤を利用して東北・みやぎ復興マラソンが開催され、全国から数多くのランナーが参加し、賑わいをみせており、現在に至つ

ております。

大津波で一瞬にして尊い命が奪われ、住み慣れた土地を離れることは想像以上に辛かったことに違いありません。十年の歳月が経ちますが少しずつ復興し、見慣れた景色が変わっていく中、希望もありながらも寂しさもおそらくあったでしょう。

しかし大震災による数多くの教訓やたくさんの方々の支援に対する感謝の心を少しでも次の世代に引き継ぎ、檀信徒はじめ地域の皆様と共に歩んでまいりたいと思います。 合掌



お寺だけが残った現在の様子

寺のみのようでした。
 お寺の事、檀家さんの事、上山した息子の事、又、日々生きて行く事。のんびりしてきた若い日の自分の巻き返しなのか、一生分の心配をした様な気がします。
 あの日から十年。「もう直せない」と、住職と檀家さんが涙を流しながら再建をあきらめかけた本堂、庫裡、会館は、大勢の方々の協力と住職の努力でなんとか使える様になりました。
 平成二十五年には簡素ながら晋山式を執り行い、気持ちを引き締める事が出来ました。



波を遮断する為の新道路

上山していた息子は、震災を知り「すぐ戻りたい」と思ったのですが、先輩に説得して頂き無事修行をすることが出来ました。現在、息子は普門寺の副住職となり、私の寺族の役目はひとつつ終えたつもりです。
 まだまだ復興の途中ではありますが、住職は檀家さんからの相談事や被災地域の復興整備で日々奔走しております。今後寺族としての役目をひとつひとつ務めあげ、住職、副住職をサポートしていきたいと思っております。
 合掌

事務局だより

- 第二回学習会（リモート研修）
令和四年二月十日（木）開催
- 令和四年度寺族会総会・集会・研修会
令和四年五月開催予定
- 東北管区第四回寺族会研修会（予定）
令和四年九月七日（水）～八日（木）
—— ホテル青森 ——



編集後記

昨年に引き続き、新型コロナウイルスの影響により、例年通りの行事が出来ない中ではありますが、新しい役員・編集委員で力を合わせ無事発行することが出来ました。
 今号発行にあたり、お忙しい中、執筆にご協力下さった皆様に心より感謝申し上げます。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い致します。
 （左記編集委員一同）

岸 恵代子	9 教区	三古寺
佐藤まさ子	6 教区	福應寺
加藤 伸子	12教区	浄音寺
佐藤富士江	17教区	能持寺
小林 美樹	21教区	見松寺
奥野 直子	5 教区	洞昌寺
日置 智恵	2 教区	輪王寺
三峯 明美	3 教区	慈雲寺
工藤 敏子	10教区	皎善寺
小松 豊実	15教区	長観寺

